
あまりにも、突然な別れ

リート

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

あまりにも、突然な別れ

【Nコード】

N5071A

【作者名】

リート

【あらすじ】

突然、彼女から別れのメールが届いた俺。あわてていつも彼女と会う喫茶店に向かった俺は、意外な人物に出会う……

あまりにも、突然な別れ

序章：別れのコトバ

1 / 27 21 : 56

「件名」

トモへ

「本文」

最初に、謝ります。

こんな方法でキミとの別れを告げる私を許してください。

でも、私なりに悩んで出した結果だから。

最初にキミと会ったのはあの広場だったよね。ブローチを落して困っていた私の前に突然現れて、無言で一緒に探してくれたよね。

結局、あの時何で無言だったのかはいまだに分からなかったんだけどね。

いくらお礼がしたいって言っても頑なに『いい』って断ってたキミは、ちよつと可愛かったな。

でもあの時は、嫌われたのかな？ ってちよつとへこんでたんだよ。

その後、キミと会うのはいつも喫茶店だったよね。他に気の利いた所が分からないって言うってたけど、本当は私の事を考えてくれたんだよね。

会って話す以外には何も出来なかったけど、私は楽しかったよ。

最初は「うん」とか「そうだね」とかしか言ってくれなかったけど、その内にいろんな事を話してくれるようになったよね。

ずつとぶつきらばうな顔だったけど、時々照れたように笑う顔が、私は一番好きだったな。

あまりにも、突然な別れ

あまりにも、突然な別れ

他にも伝えたい事がいっぱいあるんだよ。でも、もう時間がないの。
だから最後に。

好きだよ。今まで、ありがとう。

壹章：決意のコトバ

俺がそのメールを読んだのは次の日の朝だった。昨日はメールが着いていたことに気付かなくて、そのまま寝てしまったから。

はつきり言っつて、シヨックだった。

理由が分からなかった。

何で？

頭の中には疑問符ばかり浮かんでいた。そして次の瞬間、心臓を何か握りつぶされるような強い不安に襲われた。

何も考えられなかった。

俺はケータイをポケットに突っ込み、大慌てで家を飛び出した。

いつも彼女と会っていた喫茶店はここから三十分。俺は歩きなれた道を全力で駆け抜けた。

息切れなんて関係ない。足を止めてられない。もう一度彼女に会いたい、その気持ちだけで、俺は走った。

駆け込んだ喫茶店には、他に客はいなかった。

いつものウエトレスが驚いたように俺の顔を見ていたが、やがて慌てて俺の前にやってきた。

「いらっしやいませ。お一人ですか？」

「え、ええ、まあ……」

俺は曖昧に頷く。お一人？ 俺は……また一人になったのか……？

「くそっ……！」

俺は案内された席に座ると同時にポケットの中からケータイを取り出し、時間を確認する。

午前八時二十二分。

何だ、まだフユミが来る時間じゃないじゃないか。

あまりにも、突然な別れ

やんわりと話を促す。わざわざ来たからには、俺に用があるはずだ。

「すみません、突然。驚かせてしまったみたいで……」

「ええ、まあ……」

他に答えようもなく、曖昧にうなづく俺。

「何から話せばいいか……あの……いつもフユミがお世話になって
います」

「いえ、こちらこそ、いつもフユミさんにはお世話になって
います。これは社交辞令じゃない。俺は本当に、彼女のおかげで救われた
んだ。」

*

俺は引きこもりだった。……多分。

自信がないのは、自分が引きこもりだったかどうか疑わしいから
だ。

確かに学校は行ってなかった。でもずっと自分の部屋に閉じこも
っていた訳じゃない。

家族と話す事はほとんどないが、コンビニや古本屋に本を立ち読
みに行ったり、競馬やパチンコに行ったりと普通の生活を送ってい
た。

『でも一人なんだったら引きこもりと一緒にだよ』

彼女の歯に衣着せぬ一言に、後頭部を巨大な金槌で殴り倒された
かのような衝撃を受けた。

その時の俺に友達はいなかったから。家族以外に、繋がりがなか
ったから。

そして、そんな自分に漠然とした不安を抱いていたから。

『……悪かったな、引きこもりで』

辛うじてそう言い返し、さらに返す言葉を思いつき、連ねた。

『でも、もう違うから』

「ご注文はいかがなさいますか？」

気まずい沈黙が流れたところに、ウェイトレスが注文を取りに来た。見計らって、つてことでもないだろうけど。

「ホットコーヒーを」

「私も同じのを」

「コーヒーお二つですね、承りました」

ウェイトレスは伝票を置き、奥へ戻っていった。

アキコさんが口を開いた。

「……フユミは、いつもあなたの事を話しています。いい人だ、つて。あなたとお話するのが楽しいとも言っています。お父さんは渋い顔をしているんですけどね」

「はあ……」

曖昧な返事しか返せない。気の利いた台詞が出てこない。

「あなたのおかげで、フユミはかなり元気になったんですよ」

「……え……？」

予想外の言葉に、俺は思わず変な声を出してしまった。

俺のおかげで、彼女が元気に？

違う、彼女は最初から元気だった。むしろ俺の方こそ……

「お待たせしました」

「あ、どうも」

俺は考えていた事を中断して、コーヒーを受け取った。

沈黙が続く。

「あの、トモさんをお願いがあるんです」

その沈黙を破ったのは、またアキコさんだった。

何かを決意したように真っ直ぐと俺を見ている。

あまりにも、突然な別れ

「一緒に、来ていただけませんか？」

そう言って伝票を持って立ち上がる。

「は、はい……」

どこに行くのだろうか？

式章：感謝のコトバ

アキコさんの案内で到着したのは、近くの大きな大学病院だった。
「病院……？」

俺の問いかけが聞こえているのかいないのか、アキコさんはほとんど歩いていく。

「ここです」

病院の地下の、人気のない廊下。その奥にはドアが一つあり、その手前にはベンチが一つ置いてある。

そしてそこには、髪がやや白くなっている五十歳前後の壮年の男が座っていた。

直感で思った。この人がフユミのお父さんなんだと。

「……あなた……」

アキコさんの声でその人はこっちに気づき、立ち上がる。

俺はその人につられて会釈をする。

「始めまして、トモ君。私はタカシマハルオです」

「始めまして」

お互いに深々とお辞儀した。

俺はふと、ハルオさんの後ろの扉を見た。そこには『霊安室』と書かれている。

嫌な予感が、俺の中で広がっていく。

「こちらへ」

俺はハルオさんに案内されるままに部屋の中に入った。

振り返ると、アキコさんはその場に立ち止まったままだった。まるでここが聖域で、それ以上この中に入ってこれないかのよう。

部屋は暗かった。真ん中にはベッドが置いてあり、そこには顔に白い布をかけられた誰かが横たわっている。

あまりにも、突然な別れ

あまりにも、突然な別れ

嫌な予感が、さらに広がっていく。事の成り行きは、なんとなく分かる。でもそれを認める事を、俺は全力で拒否している。

ハルオさんは無言で俺を促す。

嫌だ。見たくない。

そんな気持ちとは裏腹に、俺は手を合わせて頭を下げ、そして白い布をめくる。

そこには、いつもより少しだけ白い顔をしたフユミの顔があった。死ンデイル。

厳然たる事実が俺に認証を迫る。

いや、違う。フユミは寝ているだけなんだ。だってそうにしか見えないうじゃないか。

前に一度だけ見たことがある、あの無邪気な寝顔と、全く一緒じゃないか。

どう見ても、寝ているようにしか見えない。

どう見ても……。

頬を流れる冷たい感触。俺は慌てて頬を拭う。

「トモ君……」

「え？ あ、すみません……」

俺は白い布を再び……フユミの、その顔にかける。

そして俺は再び手を合わせた。

「トモ君、ちょっと付き合ってくれるかな？」

霊安室を出た後、ハルオさんはそう俺に耳打ちしてきた。

「え、あ、はい」

「ありがとう。……アキコ、ちょっと行ってくる」

「ええ」

アキコさんはベンチに座ったまま、顔を伏せたまま小さく頷いた。

*

あまりにも、突然な別れ

案内されたのは、病院の近くにある広場。初めて彼女と出会った、あの広場。だった。

「座ろうか」

ハルオさんはそう言って手近なベンチに座る。俺も流れでその横に座る。

「フユミはね、ガンだったんだ。ステージ3とって、かなり病状が進行していた状態だった」

俺は驚いてハルオさんの横顔を見る。

彼女が、病気だった？ そんな、馬鹿な。だってあんなに元気だったじゃないか。彼女の笑顔に、そんな影なんてなかったじゃないか。

「手術しなければ、治らない。でもその手術の成功率は40%ほどしかない。最悪、手術に耐えられず寿命を縮める結果になる。私たちはそう説明を受けた」

「それをフユミさんには……」

「ずいぶん迷ったよ、話すべきかどうかは。でもフユミはもう二十歳だ。自分の事を知る権利も、義務もある。フユミは手術を受けると言った。私たちが驚くくらい、あっさりよね」

なんとなく分かる気がする。俺はそう思い、頷く。

「そして手術の直前……つまり昨日の昼のことだ。私はフユミに携帯電話を渡された。もし私に何かあったら、保存してあるメールをそのまま送ってくれ、とね」

「それが昨日届いたメール……だったんですね」

ずっと疑問だった。もう時間がない、と言うのはどういうことなのか。なぜ、最後なのか。

きつと彼女は、手術の直前にあのメールを打っていたんだ。そして覚悟もしていたんだろう。

一言ぐらい、相談してくれても良かったじゃないか。力になれなかったかもしれないけど。

でも、お前が俺の事をもっと知りたいたって言うてくれたように。俺も、お前の事をもっと知りたかったんだ。もっと知りたいんだ。

なのに、何で話してくれなかった？

「あのメールを君に送るべきかどうか、正直言っただけかなり悩んだよ。でも、フユミの遺志だったからね」

「……」

俺は両手で顔を覆った。気を抜くと、嗚咽が漏れそうになる。

「私とアキコは手術の前に、君に会う事を勧めた。でもあの子は首を振った。元気になってから会いに行けば、それで良いから。だから絶対元気になる、と」

限界だった。必死でせき止めていた感情が、一気にあふれ出てくる。

気が付けば、手のひらはぐしゃぐしゃに濡れていた。多分、目なんか真っ赤になって悲惨な事になってるはずだ。

「……すまない、トモ君。やはり話すべきではなかったな」

「そんな事、ないです」

俺は必死で首を振った。

「……ありがとう」

何でありがとうなのか、結局、俺にはよく分からなかった。

終章 想いのコトバ

あれから半年が過ぎた。早いよな、まったく。

お前の葬式、出席した。俺と違ってお前には友達がいっぱいいたんだな。みんな泣いてた。

でも不思議だな、葬式って。礼節やしきたりを重んじすぎると逆に事務的になる、って初めて気が付いた。

……ってこんな話、不謹慎だよな。ごめん、怒った？

あれからアキコさんやハルオさんと仲良くなった。この前は旅行に行ったとかで、蟹を送ってもらったんだ。さすがに、本場の蟹は美味しかった。

それとさ、パチンコ仲間が出来たんだ。昼間っからパチンコ屋に来るぐらいだから俺と同じでロクでもないおっさんなんだけどさ、何回か飲みに連れて行ってもらったんだ。

あと、謝らなきゃならない事と、報告しなきゃならない事がある。ずっと学校に行けって言うてくれてたのに、ついに高校を辞めてしまいました。

でもさ、春から定時制の高校に通ってる。ちゃんと毎日出席もしてるし友達もできた。

俺、もう一人じゃないからな。もう引きこもりなんて言わせない。

初めて会った時、あつただろ？ あの時の俺は人を信じられなくなってたんだ。他人のことが怖くなった。

でも必死で何かを探してるお前を見てたら、自分でも気付かない内に手伝ってたんだ。でも後ですごく恥ずかしくなって、何も話せなかったんだけどな。

お前はお礼がしたいって強情に言い張ってたけど、結局あのブロイチを見つけたのはお前だったじゃないか。

あまりにも、突然な別れ

役に立てなかったから別にいい、って断った俺を無理矢理引っ張っていつてさ、拳句の果てに『どこに行こうか？』だって。あの時は『計画性ゼロかこいつは！』なんて思ったな。

俺はお前の病気に気が付いてたわけじゃないんだ。本当に、他に気の利いた所を知らなかったから、ずっとあの喫茶店にしか連れて行けなかった。……まさか競馬とかパチンコに連れて行くわけにも行かないだろ？

お前がくれた最後のメール。あれ、やっぱり許せないな。

最後の一言は、どっちかって言うとな俺の台詞だし。

だから今度は俺から。今まで伝えられなかったけど。

「フユミのこと、好きだ」

そして、ありがとう。

……俺、もうそろそろ行くよ。

来年はもっというんな土産話を持ってくるからさ、それまで待ってて。

じゃあ、またな。

あまりにも、突然な別れ

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5071a/>

あまりにも、突然な別れ

2008年11月7日08時12分発行